

文学博士金子金治郎君の「菟玖波集の研究」に対する授賞審査要旨

「菟玖波集の研究」は広島大学教授金子金治郎君の著であり、昭和四十年十二月刊行されている。

本書は、序章、菟玖波集とその研究、第一編菟玖波集成立以前、第二編菟玖波集の成立と作者、第三編菟玖波集の作品と風体よりなり、巻末に菟玖波集関係年表と金子君によつて新しく学界に紹介された広島大学本菟玖波集の翻刻とがあり、精細な索引が添えられている。

序章では連歌史と菟玖波集、菟玖波集への関心と研究、菟玖波集研究の問題と方法とにわけて菟玖波集の従来の研究を概観し、菟玖波集研究の問題として成立、伝本、資料、構成、作者、作品、風体などの研究分野があることを説いている。第一編は菟玖波集成立以前の考察であつて、まず連歌形態の発達をとき、鎌倉期連歌に百韻連歌の成立したことを扱い、さらに賦物の制とその推移を明らかにしている。次いで公家連歌の隆盛を後鳥羽院時代、後嵯峨院時代、後宇多院時代にわけて主な公家連歌師をあげて扱っている。また京都の連歌に対して鎌倉や宇都宮における武士の連歌をとりあげ、花下連歌の歴史と形態をとるとき、花下連歌の代表的な作者として善阿法師を考察し、次いで南北朝連歌の基盤として鎌倉出身の連歌師の京都への進出をとりあげている。とくに鎌倉出身の連歌師順覚の伝を考察し、賦物連歌から去嫌連歌への展開をととき、新発見の資料連証集などを資料として寄合の発達を明らかにしている。

第二編菟玖波集の成立では菟玖波集の成立が北野信仰と深い関係のあつたことを菟玖波集の神祇連歌の中に北野に關係のある句が十句あることを挙げて実証的に考察し、菟玖波集の伝本の考察では、かつて福井久蔵氏の調査された

二十五本に加うるに十四本を以てし、合わせて三十九本を調査し、これを第一類、素眼本系統諸本、第二類、流布本系統諸本、第三類、聖光明院識語本系統諸本の三類にわけ、その本文の異同を明らかにしている。菟玖波集の資料と構成については編集資料となつた句集として古今連歌集、連証集、連葉集等をひろく調査し、また短連歌、長連歌の資料やその扱方についても種々の考察を加えている。また部立や構成を精細にとき、集中の作者四百五十人を一々検討し、そのうち、伝記の手掛りのないのが百三十人あるとしている。そうして作者を公家作者、武家作者、地下作者にわけ、救済とその門流をはじめ、多くの連歌作者について精密な調査を行ない、明らかにした点が多い。

第三編菟玖波集の作品と風体においてはその作品が長い時代にわたつている点や作品の多様性を指摘している。第一に集中の俳諧連歌の性質として卑俗性（題材）、語戯性（修辭）、奇矯性（構成）をあげて考察しており、更に連句連歌の性格を扱い、発句における季題の状況や表現の技法をとぎ、句風を分析し時代による相違を挙げている。また付句について発想の場や寄合の雅俗、付合の志向、付合の史的位相を考察している。終わりに、菟玖波集の新風連歌では道誉の風、良基の風に対して救済の風を新風とし、寄合を十分にとり、しかも前句と付句とが的確に焦点を結ぶ点に救済連歌の根本的な特色があると述べている。

本書は菟玖波集を全般的に考察し、これまでのこの集の研究を集大成した趣きがある。かつ随所に新見や卓見も見られ極めて着実な業績と認められる。その特色としてはこの集の成立に至るまでの連歌の進路をよく跡付け、伝本を調べて正しい文献学的成果を志し、また広範囲にわたるこの集の資料の調査や作者伝の綿密な吟味を行なうなど実証的方法を尽くしている点において良心的な学術的な作業であると言える。ただ作品の文藝的価値の考察にはあまり力

点を置いていないらしく、作品と風体の部分は全体の二割に足らず、なお残された問題が少なくない。しかし連歌の文藝的価値の問題は後年の発達した段階に関連させて論じない限り、菟玖波集の時代ではまだとりあげることが困難であると思われるので、やむを得ないと見られる。

本書の目的とするところは金子君が序章で述べているように、性急な総括的な結論に赴むことを避け、個々の事実の追求に全力を挙げるといふ点にあり、その意図はよく達成されていると認められる。